

最終レポート

2014年8月から2015年4月にかけてのフィンドレー大学留学、ニッシンブレイキオハイオでのインターンを通して、自分の中で様々な変化がありました。アメリカ人との交流を通じて、文化の違いや考え方の違いを知ることができました。その中で最も印象に残った3点を紹介します。

・大学での経験 日常生活に見る文化・思想

フィンドレー大学には機械工学の授業はありませんでしたので、後期の学部の授業では、哲学と宗教と歴史の授業を選択しました。その中でも宗教の授業は私に多くの新しい知見を与えてくれました。私が受講したのは”Introduction to Religion”という授業で、キリスト教やイスラム教、道教といったメジャーな宗教の特徴を学ぶ授業でした。

この授業の中で、次の2点が特に印象に残りました。

1つ目は儒教の考え方です。年長者を敬うなどの基本的な考え方が年功序列等の形となり、現在の日本社会に根付いていると感じました。無宗教と言われる日本でも宗教の一部が浸透していたことは意外でした。

2つ目は儒教とキリスト教の考え方の違いです。年功序列や先生を敬うことを教える儒教に対して、キリスト教では人間は皆平等であるとされています。両者の違いは日本とアメリカの考え方の根本的な違いに結びつくものだと考えられます。

実際に、大学の授業やインターンで、この考え方の違いを体験しました。まず、フィンドレー大学の授業では、日本での大学の授業と比較して、教授と学生の距離が近いように感じました。日本の授業では、教授が学生に一方的にレクチャーするスタイルが一般的かと思いますが、フィンドレー大学での授業ではディスカッションに重きが置かれています。時には、学生が教授に反対意見を言うこともありました。アメリカでは学生が教授とコミュニケーションを取りやすい環境でした。インターンでは、上司や年上の人であっても、ファーストネームかニックネームで呼んでいました。上司であっても敬語などの堅い言葉を使う必要がないので、社内でのディスカッションは非常にやりやすかったです。

先ほどアメリカではキリスト教が広く信じられていると書きましたが、一言でキリスト教といっても、カトリックとプロテスタント、さらに細分化してさまざまな教派があり、フィンドレーにもたくさんの教会があります。そもそもフィンドレー大学は、教会と市が協力して設立されたものです。アメリカ人の友人やその家族には、日曜日には必ず教会に行くという人が多く、キリスト教が生活になじんでいました。

私も、友人の家族に連れられて、何度か教会に足を運びました。教会にもよりますが、私が行ったところは初めて来た人にもやさしく、特に居心地が悪くなること

はありませんでした。私はキリスト教を信仰しているわけではありませんが、日曜日に多くの人と一緒に歌を歌ったり牧師の話を聞いたりしていると周りの人達との一体感を感じ、普段の忙しさを忘れられる気がしました。

アメリカで生活していて、キリスト教の影響を感じたのは、ボランティアの機会が多いことです。私も、フィンドレー市内で、個人宅の壁のペンキ塗りや庭の草むしりなどのボランティアに参加しました。このような機会は年に何回かあり、フィンドレー市内の教会が協力して運営しているそうです。私の参加した活動は大学に紹介されたものですが、そのほかにも各教会でそれぞれ行っているボランティア活動もあるようです。このように教会はボランティア活動の拠点となり、地域に密着した活動をしています。

日本では、キリスト教に限らず「宗教」に対する理解がアメリカほど進んでいないように思います。たしかにアメリカでもイスラム教に対する間違った理解がされていると感じるときはありました。しかしそれ以上に、日本は、あらゆる宗教に関して盲目的に悪いイメージを持ってしまっている気がします。私自身、アメリカで初めて教会に行く時は抵抗がありました。しかし、宗教は、人の行動規範や文化を決定する重要な要素であると言えます。宗教全般に対する学問的知識を教えるような機会を教育に取り入れる事が日本でできれば、より深く異文化を理解したり新しい知見を得たりすることができると思います。

・仕事観の違い

このプログラムでは、週2日、ニッシンブレイキオハイオ(NBO)でインターンをさせていただきました。アメリカ人のエンジニアと作業したり、休憩時間に雑談したりする中で、年功序列以外にも、日本人との考え方の違いを見ることができました。例えば、アメリカ人のエンジニアは基本的に残業をしません。定時の4時になるとすぐに帰宅することが慣例のようです。これについてエンジニアは、「残業代が出るからあえて残業してお金を稼ぐこともできるが、それはしない」とっていました。

NBOには日本からの駐在員もおり、その方々ともよく話をしました。また、まれに、駐在員の方に頼まれて通訳をする機会もありました。アメリカ人エンジニアと駐在員の方双方の話を聞くと、どこか食い違いがあるように感じました。アメリカ人エンジニアたちは、1か月や2か月という短いスパンで生産量を上げようとする傾向があるように感じました。これに対して駐在員の方々は、2・3年先を考えて、今何をすれば長期的に見て良くなるかを考えているようでした。

また、仕事の質でみると、アメリカ人エンジニアは、比較的短い期間内に合格点の質に仕上げるのを好む傾向にあると思います。長い時間をかけて一つのプロジェクトを徹底して行うことをあまり好みません。これとは逆に、日本人は完璧に仕上げるのが第一で、そのためには多少長い時間がかかっても問題ないと考えているように思います。どちらが良いか悪いか判断するつもりはありませんが、根本にこのような考

え方の違いがあるように感じました。

一つの例として挙げられるのは、私たちインターンが行ったプロジェクトです。工具寿命の管理・分析には長い時間をかけてデータを集める必要があります。しかし、コスト削減の効果はあるもののそれに費やす時間が長いため、アメリカ人エンジニアたちは自分たちはやりたくないと言っていました。このようにアメリカ人は時間を優先して考えることが多かったです。たしかに、機械整備の知識があるエンジニアにデータ収集をさせるのはもったいないので、機械を直接整備できる知識の少ないインターンにはちょうどいい仕事ではありました。

このように、駐在員とアメリカ人エンジニアで仕事に対する考え方が違う事もあったものの、お互いNBOをより良くしようという気持ちで仕事をする姿勢は変わらなかったように感じます。

2か所ほど、他の工場を見学する機会がありました。そのうちの一か所がホンダオブアメリカのトランスミッション工場でした。見学の案内をしてくださったエンジニアいわく、この工場は半径50マイル(80km)以内では最高の工場であるとのこと。確かに工場の広さがNBOをはるかに上回るにも関わらず従業員数はそれほど変わらず、ほとんどの工程が自動化されており、全体的に洗練された印象でした。

ここにも日本人の駐在員がいらっしゃるようですが、立場としてはあくまでアドバイザーであり、基本的な作業の方針等はアメリカ側で決定するそうです。案内をしてくださったエンジニアに日本人駐在員と仕事をするにあたって上手いかなかったことはあったかという質問をしたところ、たまに議論になることはあるが上手いかないというほどではないとおっしゃっていました。国による文化の違いよりも性格など個人差の方が仕事をする上で重要ではないかとの御意見も頂きました。

NBOもホンダオブアメリカも日本企業の海外工場といった位置づけで、人によってはこういった企業を「日系企業」とまとめて呼称することもあるかと思います。しかし、この2か所を比較しただけでも、それぞれが全く異なった方針で運営されていることがわかります。異文化のバックグラウンドを持つ方と協力して成功を収める方法は必ずしも一つではないことがわかりました。また、どの方法でも避けて通れない問題が必ずどこかにあるように感じます。私が将来、企業の海外工場で働くことがあれば、NBOでのインターンで学んだアメリカ人と日本人の仕事観の違いを念頭に置いたうえで、この経験だけに固執することなく、その国の文化や人を良く知ることで現地の方と我々双方が働きやすい環境を作りたいと思います。

・最後に 名前の大切さ

この留学を通じて、コミュニケーションにおいて意外に見落としがちな重要ポイントを発見することができました。そのポイントとは「名前」です。

アメリカでは親しい間柄ではファーストネームで呼び合うのが一般的です。しかし、

私の名前”Ryunosuke”は、アメリカ人にとっては極めて発音しにくい名前のように、自己紹介のときに自分の名前を言った途端に相手の顔が引きつることが多々ありました。

そこで、インターン用の作業着に名札を付ける段階で自分に”Robin”(ロビン)というニックネームを付けました。このニックネームのおかげで多くのアメリカ人に簡単に覚えてもらうことができました。自己紹介で本名を言った後に、ロビンと呼んでくれと言うと相手の顔が明らかにほっとした表情に変わるのが印象的でした。

また、会話の中で、時折相手を名前で呼びかけることで相手との距離が縮むように感じました。その名前が呼びやすいものだと、会話する機会も増えます。アメリカで出会った友人のほとんどが私の本名を覚えていませんが、その代わりにロビンという名前で覚えてくれています。

この留学中の思い出はロビンという名前とともに私の記憶に焼き付いています。異文化の中で得た経験は必ずしも良いものばかりではありませんでしたが、そのすべてが私を一回りも二回りも成長させてくれる意味のあるものだったと思います。

最後になりますが、このような貴重な経験をする機会をくださった埼玉県と日信工業の皆様、フィンドレー大学の川村先生をはじめとした関係者の皆様、NBO の皆様に感謝して私の最終レポートとします。

